

[16]

氏名	こまつ たかひろ 小松 貴弘
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	博第 521 号
学位授与の日付	2020 年 9 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	心理療法作用としての経験の構成モデル —その射程と可能性—
論文審査委員	主査教授 池見 陽 副査教授 石田 陽彦 副査教授 串崎 真志

論文内容の要旨

本論文は、心理療法の作用に関する考え方に一つのモデルを提示し、その特徴と意義と射程を論じることを目的としたものである。本論で提示されているモデルは、論文提出者小松貴弘氏が「経験の構成モデル」と名付けたもので、アメリカ合衆国の対人関係精神分析家である Donnel B. Stern の“unformulated experience”の概念に依拠するものである。小松氏は Stern の臨床概念を発展的に拡張させ、ひとつのモデルを提示した。

序章「岐路に立つ現代社会における心理療法」では、本論文の導入部分として、本論文全体の背景となる、現代社会における心理療法のあり方の課題に関する小松氏の認識が概略的に示されている。

第 1 章「対人関係精神分析の歴史と特徴」では、経験の構成モデルの源流である対人関係精神分析 (Interpersonal Psychoanalysis) の基本的な考え方と、精神分析の世界の中でのその位置づけについて概説されている。伝統的な精神分析が主としてクライアントの内的世界に焦点を当てることに対して、対人関係精神分析は主としてクライアントが実際に営む対人関係に焦点を当てること、そうした両者の考え方と実践の違いは、一者心理学と二者心理学の違いとして捉えられることが論じられている。

第 2 章「Stern の未構成の経験の概念」では、「経験の構成モデル」が立脚する考えである Donnel B. Stern が提唱した未構成の経験の概念が検討されている。Stern は経験を、それ自体客観的な意味を持つものではなく、解釈され、構成されることで意味を持つものとして捉え、何かが無意識的であることを、そこでは経験が未構成の状態に留め置かれていることとして理解していること、そして、経験が未構成に留め置かれている状態を解離の働きと

して捉え、抑圧されて無意識的である経験という伝統的な理解のあり方との違いが検討されている。

第3章「経験の構成と対人関係の場」では、未構成の経験が構成される過程と、そうした過程が生じる対人関係の場についての考え方が検討されている。未構成の経験が構成されるには対人関係の場がなくてはならないこと、そのとき構成される経験のあり方は、その対人関係の場のあり方によって大きく左右されること、したがって、対人関係の場は、経験の構成にとって、成立のために不可欠の条件であると同時に、そのあり方を制約する条件でもあることが論じられている。

第4章「経験の構成モデルとその射程」では、経験の構成モデルの概略を提示して、その射程の可能性を探る目的で Eugene Gendlin の体験過程理論との接点が論じられている。経験の構成モデルの観点からは、精神分析とは全く異なる系譜にある Gendlin の体験過程理論との間に多くの共通点が見られること、そのうえで、経験の構成モデルは精神分析に限定されるものではなく、幅広い心理療法のオリエンテーションの基本原理として適用できる可能性があることが論じられている。

第5章「クライアントは何を語るのか」では、クライアントは語ることを通じて何をしていて、クライアントが語ることには何が表現されていると考えられるのかが検討されている。クライアントが語ることとクライアントの経験との間にはどのような関係が成り立ちうるのか、クライアントの語りが面接における「今ここで」の語りであることの意義、そして、語ることとそれによって意味されることとの関係が論じられている。

第6章「セラピストは何を聞くのか」では、そうしたクライアントの語りをセラピストはどのような聞き方で聞くことができるのか、セラピストの聞き方の違いによって心理療法の過程にどのような違いが生じる可能性があるのかが検討されている。クライアントの語りを聞くセラピストの聞き方を、①文字通りに受け止めて聞く、②何を言わんとしているのかを聞く、③心の状態の記述あるいは反映として聞く、④語りがどこに向かうのかを見届けようと努めて聞くという、小松氏が考える4つの聞き方のタイプ、それぞれの聞き方の特徴と意義、それらがクライアントの語りのあり方とセラピストの聞き方に及ぼす影響、そしてそれぞれの聞き方において暗黙的に働いているセラピストの心理療法観について論じられている。

第7章「クライアントの語りをセラピストが聞くことの意義」では、クライアントの語りをセラピストが聞くことが、そもそもどのような意味において心理療法において不可欠な営みであるのかが検討されている。面接においてクライアントが語ることの意義を経験の構成モデルの観点から改めて捉え直し、そのような捉え直しによってセラピストが聞くことの意義にどのような新しい視点がもたらされるのか、経験の構成には対人関係の場が大きな役割を果たすという見方からはセラピストの聞き方に面接関係が及ぼす影響がどのように捉え直されるのか、そしてそうした見方からは心理療法過程に対するセラピストの関与のあり方がどのように捉え直されることになるのかといった問題について、伝統的な精神分析的な心理療法の立場の理解のあり方を参照して、それと対比しながら論じられている。

第8章「心理療法の過程の停滞や行き詰まり」では、心理療法の過程の行き詰まりが生じている状態を理解する観点の一つとしてのエナクトメント概念が検討されている。心理療法の過程の行き詰まりについては、伝統的な立場では抵抗として捉えられてきたが経験の構成モデルにおいてはそれとは異なる捉え方ができること、そのような捉え方の一例としてそれをエナクトメントとして捉える考え方があること、エナクトメントという捉え方が伝統的な抵抗としての捉え方とどのような点で異なるのかが論じられている。

第9章「関係精神分析におけるエナクトメント概念」では、エナクトメント概念について、その歴史とこの概念の理解のあり方をめぐる論争について検討している。主として精神分析の世界にエナクトメント概念が導入された経緯を確認し、エナクトメント概念をめぐる学派の違いによってどのような相違が生じているのかが検討されている。そのうえで、エナクトメントをめぐる諸学派の立場の違いは主として無意識的な経験の性質に関する違いであること、そしてどのようにすれば心理療法の中でセラピストがエナクトメントを扱うことができるのかをめぐる考え方の違いであることが論じられている。

第10章「エナクトメント論とその射程」では、エナクトメントの概念と転移・逆転移の概念を比較して検討している。心理療法過程においてクライアントとセラピストの間に生じる関係とその推移について、それをエナクトメントとして捉えることと、伝統的なやり方で転移・逆転移として捉えることの間にはどのような相違があるのか、Sternが定式化するエナクトメント概念や小松氏の経験の構成モデルはこれまでの伝統的な理解とどこが違うのか、どのように異なる視野を切り開いているのかを検討し、そうした捉え方の違いの根底には心理療法作用に関する考え方の違いがあることが論じられている。

第11章「エナクトメントが解消する過程」では、Sternの臨床ヴィネットを素材として、エナクトメントが解消するとはどういうことであるのかを小松氏の観点から検討している。エナクトメントが解消する過程において①何がわかったのか、②何が変わったのか、③理由はどこにあるのか、の三つの観点から、エナクトメントの解消の過程を、経験の構成モデルの立場からはクライアントとセラピストの間に生じた対人関係の場の変化により新しい経験の構成が可能になった過程として捉えることができること、それは精神分析において伝統的な転移・逆転移に関する洞察と解釈が心理療法の過程を動かすとする捉え方とは異なる理解のあり方であることが論じられている。

最後に、終章「経験の構成モデルの意義と射程」において、序章で述べた小松氏の現状認識と問題意識に応える形で、経験の構成モデルが現在の心理療法の実践をめぐる状況に対して、そして現代社会のあり方に対して、どのような意義を持ちうる可能性があるかについての小松氏の見通しが示されている。経験の構成モデルは、精神分析のオリエンテーションに限定されず、Gendlinの体験過程理論やシステム論の考えに基づいたセラピーやオープンダイアログの取り組みとも接点を持っていること、また精神分析の内部においては伝統的なオリエンテーションと相互補完的に働く考え方でありうること、現代社会におけるテクノロジーの発展に伴う私たちの経験のあり方の変質を捉えてそれへの向き合い方を考えるための重要な視点を提供しうること、そして心理療法家が取り組むべき課題として経験の拡張を通じた自由の拡張という理念を提供しうるという見通しが示されている。

論文審査結果の要旨

審査委員3名がそれぞれの専門性から論文内容について試問した。Stern の業績及び、本論文における社会構成主義の妥当性、「解離と抑圧」に見られる本論文と従来の精神分析論との発想の違い、本論文と E.Gendlin の体験過程理論との共通性及び相違点、「構成する」ということや“inter-subjective”をどのように理解しているか、などに及んだ。それらの結果、充実した学術的議論が展開し、小松氏は本論の内容について高い専門知識を有していることが確認できた。

以下、審査委員の見解を記述する。

(1) 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

本論文の課題は「心理療法作用としての経験の構成モデル」を構築することであると適切に設定されている。小松氏は Donnel B.Stern が提示した「未構成の経験」(unformulated experience) を基盤におき、そのうえに構成主義の観点を加え、このモデルを展開し、その射程を明らかにしている。

(2) 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

国内での対人関係精神分析の先行研究はそれほど広範ではないが、小松氏はそれらを丁寧に検討している。Donnel Stern の業績については、小松氏はいくつかの論文を翻訳し、また著作 *Partners in Thought: Working with Unformulated Experience, Dissociation, and Enactment* を日本語に翻訳しており（「精神分析における解離とエナクトメント：対人関係精神分析の核心 創元社」）、Stern の研究については日本の第一人者であるといえる。

(3) 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

本研究は理論研究であり、本論の目的である「経験の構成モデル」の構築のためには適した方法である。

(4) 論文構成が的確で、論理展開に整合性、一貫性、説得性があること

論文は3部構成で、第1部では「経験の構成モデル」が提示されている。第2部では、そのモデルを展開して「語るクライアントと聞くセラピスト」をどのように理解するかが示されている。第3部の「心理療法の過程とその行き詰まり」では、心理療法での語ること・聞くことの問題点をどのように理解するかが「経験の構成モデル」の観点から検討されている。その意味では、本論の論理展開には整合性、一貫性がある。

(5) 全体を通して社会的・学術的な独創性が認められること

Donnel Stern の unformulated experiences を土台として、それを発展させ心理学的な

モデルを構築したことには独創性がある。小松氏はこのモデルを用いた研究論文を日本心理臨床学会や日本人間性心理学会などで報告しており、そのモデルには学術的な意義がある。

(6) 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

上記のように、小松氏は自らが見出した「経験の構成モデル」を用いた研究論文を国内学会で発表している。しかし、海外の学術誌などにはこれまでに報告されておらず、海外への発信が今後期待される場所である。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。